富岡・甘楽の赤い土器

甘楽パーキング展示施設

上信越自動車道上り線、甘楽パーキング内にある展示施設

■赤く彩られた弥生土器

群馬県西部の弥生遺跡では、器面を赤く塗った土器が発見されます。赤く彩られた土器は艶やかで、ひときわ目を引きます。赤い顔料はベンガラで、土器を焼く前に着色されました。これに良く似た土器が長野県千曲川流域の弥生遺跡から発見されますが、出土量は長野県側が圧倒的です。赤い土器の本場は長野県側にあったようです。

展示品は、いまから 1,900 年ほど前の竪穴建物から発見された弥生時代後期の土器です。樽式土器と呼ばれるもので、穀物貯蔵用の壺や煮炊き用の甕（かめ）、高杯（たかつき）・鉢などがあります。南蛇井増光寺遺跡（なんじゃいぞうこうじ）（富岡市）の土器は、お隣の長野県佐久地方の土器によく似ていると言われています。

■赤彩される土器の種類

南蛇井増光寺遺跡では壺の 1 割、高杯は 2/3、鉢は 1/4 が赤彩されていたことが分かっています。長野県佐久市西北の久保遺跡では壺の半数が、高杯や鉢にいたっては 70～90%が赤彩されていました。群馬県側では壺も高杯も鉢も赤彩される割合が少なくなりますが、両県とも煮炊き用の甕は赤彩されることはほとんどなかったようです。

■赤彩土器の秘密

なぜ、土器は赤彩されたのでしょうか。

色彩学の世界では、「赤」は太陽や血、火をあらわすといいます。また、「赤」は悪霊や災厄（さいやく）を払う力があるとされ、神社の鳥居が赤いのも神社の中に悪霊を入れないためだと言われています。

高杯や鉢などは見えるところすべてが赤く塗られます。壺は口縁や胴部が赤彩され、全体が赤彩されることはなかったようです。大切な稲籾を入れた壺の口縁を赤いベンガラで塗ったのは、邪気が中に入り込まないよう願ったからでしょう。

富岡・甘楽の赤い土器

■鋸歯文

鋸歯文（きょしもん）も、邪気を払う文様とされています。鋸歯文は銅鐸（どうたく）の鈕（ちゅう）や鰭（ひれ）に描かれた三角形の幾何学文で、ノコギリの刃のように見える文様です。鋸歯文は蛇が絡み合う姿をデフォルメしたものとも、脱皮するその姿から「生命再生」のシンボルともされます。縄文時代の土器には蛇がリアルに表現されるものもあります。弥生土器の器面を飾る鋸歯文は、縄文人の信仰に相通じる文様とも言えるでしょう。

富岡市の弥生遺跡

富岡市には、弥生時代後期の拠点集落３遺跡が知られています。下仁田町に近い南蛇井増光寺遺跡、鏑川と高田川の合流点に近い阿曽岡（あそおか）・権現堂（ごんげんどう）遺跡、比高差 50 m近い丘陵上に立地する中高瀬観音山（なかたかせかんのんやま）遺跡の３遺跡です。遺跡の立地条件は異なりますが、いずれも鏑川流域にある遺跡です。南蛇井増光寺遺跡、阿曽岡・権現堂遺跡は平坦地にある遺跡ですが、中高瀬観音山遺跡は遠くまで見通せる丘陵上にあるということで注目された遺跡（富岡インター西のトンネル上にある）です。富岡市が行った調査では、竪穴建物の広がりや大型の方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）が確認されるなど、集落の様子が明らかになりました。

南蛇井増光寺遺跡

遺跡は富岡市西部にあり、下仁田インターチェンジ北の鏑川を渡った段丘上にあります。弥生時代の集落は南北 400 m･東西 200 m（6 ha）に広がるとみられ、県内屈指の規模になりました。集落は紀元 1 世紀から 2 世紀中頃のもので、181 棟の竪穴建物が発見されました。

竪穴建物全景（南蛇井増光寺遺跡）

南蛇井増光寺遺跡の生産域

発掘調査では集落は発見されましたが、水田や畑は発見されていません。遺跡は鏑川左岸の段丘上にあり、想像以上に高低差があります。それでは、どこに生産域があったのでしょうか。

水田をつくるなら蚊沼川流域に広がる低地が有力視されます。集落の西側には水田にできるようなところはないので、集落西の平坦地では畑作も考えておく必要もありそうです。生産域を含めれば、集落は想像以上に広がるものと思われます。

富岡・甘楽の赤い土器

甘楽町の弥生遺跡

甘楽パーキング内には深い谷を挟んで天引向原（あまびきむかいはら）遺跡と天引狐崎（あまびききつねざき）遺跡があり、パーキング西には白倉下原（しらくらしもはら）遺跡があります。発掘調査では向原遺跡 37 棟、狐崎遺跡 34 棟、下原遺跡 22 棟の竪穴建物が確認されています。集落の全貌は不明ですが、それぞれの集落には一時期数棟の竪穴建物が立ち並んでいたと想定されています。

白倉下原遺跡からは多量の磨製石鏃（ませいせきぞく）が発見されたことで、磨製石鏃の製作に特化した集落であることが分かりました。向原遺跡も狐崎遺跡も弥生時代後期の集落です。それぞれの集落は深い谷を挟んでいますが、集落が同時期であることを考えると、まったく無関係ということはなさそうです。

天引向原遺跡（甘楽 PA）出土の赤彩壺

右の写真は、42 号竪穴建物から出土した高さ 64.8cm の大型壺です。頸部から上を意図的に打ち欠き、壺棺（つぼかん）として用いた可能性も否定できませんが、建物の出入口側から投げ込まれた状態で発見されました。

下の写真は赤彩された小型壺で、121 号竪穴建物から発見されました。壺の外面は、口縁部や頸部付近の文様を避けて赤彩されていますが、壺の内面も口縁から頸部まで見えるところはすべて赤彩されています。

遺跡・施設の位置

富岡・甘楽の赤い土器

沿線の関連遺跡・施設

中高瀬観音山遺跡

中高瀬観音山遺跡は遠くまで見渡せる小高い丘陵上にあり、100 棟を超える竪穴建物が発見されました。柵で囲まれた大規模な拠点集落であることが明らかになり、1998(平成 9) 年に国の指定史跡となりました。

甘楽古代館

甘楽古代館には、弥生時代後期と見られる「銅戈（どうか）」が復元展示されています。東日本で初めて発見されたということで、破片ですが極めて重要な発見となりました。

古代館は校倉（あぜくら）つくりで、味わい深い資料館となっています。平日のみの開館（無料）になります。落ち着いた雰囲気を楽しんでみてはいかがでしょうか。

【逸品紹介】

事業団発掘情報館の収蔵展示室には、渋川市有馬（ありま）遺跡、高崎市日高（ひだか）遺跡、新保田（しんぼた）中村前（なかむらまえ）遺跡、小八木志志貝戸（こやぎしししかいと）遺跡、前橋市清里庚申塚（きよさとこうしんつか）遺跡などから出土した赤彩土器が遺跡毎に展示されています。

展示資料を見ると、やや沈んだ小豆色をした土器ほど保存状態が良く、明るく見える土器ほど器面が荒れていることが分かります。同じ赤彩土器でも色の明暗があり、焼き上がりが違って見えるのは、なぜなのでしょうか。ぜひ、実物を見比べて想像してみてください。